

氏 名	古森 紘基
学 位	博士
専門分野の名称	歯学
学位授与番号	博甲第4929号
学位授与の日付	平成26年3月25日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科機能再生・再建科学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	矯正歯科治療患者の口腔関連 Quality of Life の評価
学位論文審査委員	森田 学 教授 仲野 道代 教授 上岡 寛 准教授

学位論文内容の要旨

【目的】患者の口腔関連Quality of Life (Oral Health-Related Quality of Life; OHRQoL)の改善は、矯正歯科治療の重要な目標の一つである。しかし、矯正歯科治療患者のOHRQoLの状態についてはあまり詳細な研究は行われておらず、矯正歯科治療においてOHRQoLの評価はあまり行われていない。そこで、本研究では矯正歯科治療前の患者のOHRQoLの評価と、矯正歯科治療後のOHRQoLの評価を行うことで、矯正歯科治療患者のOHRQoLの状態の評価を行った。

【方法】矯正歯科治療前の患者群は本格矯正を希望して岡山大学病院矯正歯科を受診した患者92名（男/女：22名/70名、平均年齢 26.4 ± 12.4 歳）とした。矯正治療後の患者群は岡山大学病院矯正歯科にて矯正歯科治療を行った患者85名（男/女：19名/66名、平均年齢 25.4 ± 7.8 歳）とした。対照群は岡山大学および吉備国際大学の学生48名（男/女：12名/36名、平均年齢 22.5 ± 5.2 歳）とした。矯正治療後の患者群は、矯正治療後のOHRQoLと治療前を回顧したOHRQoL（回顧治療前OHRQoL）について同時に評価を行った。OHRQoLの評価には、Oral Health Impact Profile (OHIP)の日本語版（OHIP-J54）とその回顧型質問票を用いた。統計解析は解析ソフト（エクセル統計2010、Social Survey Research Information）を使用して、カイ二乗検定、Mann-WhitneyのU検定、Steel-Dwass法と重回帰分析を用いた。全ての検定において有意水準は $p=0.05$ とした。

【結果および考察】矯正治療前の患者群と対照群の性別、年齢、年収、DMFT歯数、Community Periodontal Index (CPI)について比較した結果、両群間で有意差は認められなかった。矯正治療前の患者群のOHRQoL得点（Median 28.0点、IQR 30.8点）は対照群のOHRQoL得点（Median 14.0点、IQR 16.5点）に比べて有意に高かった。矯正歯科治療を希望する患者は不正咬合を有していると考えられるため、不正咬合がOHRQoLを低下させる一つの原因である可能性が示唆された。OHIP-J54には全部で7つの質問領域があり、機能の制限、心理的不快感、身体的障害、心理的障害、ハンディキャップの質問領域において矯正治療前の患者群と対照群の間に有意差が認められた。一方、痛みと社会的障害の質問領域では有意差が認められなかった。

矯正治療前のOHRQoL得点と諸因子の関連性を関連性を調べたところ、DMFT歯数がOHRQoLに与える影響と同程度に、矯正歯科治療希望の有無がOHRQoLに影響を与えることが示唆された。また、矯正治療後の患者群と対照群の性別、年齢、年収、DMFT歯数、CPIについて比較した結果、両群間で有意差は認められな

かった。矯正治療後の患者群の治療後OHRQoL得点（Median 13.0点、IQR 17.0点）は、回顧治療前OHRQoL得点（Median 37.0点、IQR 38.0点）と比較して有意に低く、治療後のOHRQoLが高いことが明らかになった。また、矯正治療終了後の患者群の治療後OHRQoL得点は対照群のOHRQoL得点（Median 14.0点、IQR 16.5点）と比較して有意差が認められなかった。

【結論】矯正歯科治療を希望する患者は希望しない人に比べてOHRQoLが低下していることが明らかになった。また、矯正歯科治療後のOHRQoLは回顧治療前に比べて有意に低下し、対照群と同じ程度に改善していることが示された。以上から、矯正歯科治療の目標設定の指標の一つとしてOHRQoLが重要であること、矯正歯科治療はOHRQoLの向上に寄与できることが示唆された。

学位論文審査結果の要旨

患者の口腔関連Quality of Life (Oral Health-Related Quality of Life: OHRQoL)の改善は、歯科治療の重要な目標の一つである。しかしながら、矯正歯科治療患者のOHRQoLの状態については詳細な研究は行われていない。そこで、本研究は矯正歯科治療前の患者と矯正歯科治療後の患者を対象に、Oral Health Impact Profile (OHIP)を用いたOHRQoLの評価を行うことを目的とした。

矯正歯科治療前の患者群は本格矯正を希望して岡山大学病院矯正歯科を受診した患者92名（男/女 22名/70名、平均年齢 26.4±12.4歳）とした。矯正治療後の患者群は岡山大学病院矯正歯科にて矯正歯科治療を行った患者85名（男/女 19名/66名、平均年齢 25.4±7.8歳）とし、対照群は岡山大学および近隣大学の学生48名（男/女 12名/36名、平均年齢 22.5±5.2歳）とした。矯正治療後の患者群は、矯正治療後のOHRQoLと治療前を振り返り記載したOHRQoL（回顧治療前OHRQoL）について同時に評価を行った。OHRQoLの評価には、OHIPの日本語版（OHIP-J54）とその回顧型質問票を用いた。統計解析は解析ソフトを使用した。

矯正治療前のOHIP得点（中央値 28.0点、四分位範囲 30.8点）は対照群の OHIP得点（中央値 14.0点、四分位範囲 16.5点）に比べて有意に高かった。矯正治療後のOHIP得点（中央値 13.0点、四分位範囲 17.0点）は、回顧治療前 OHIP得点（中央値 37.0点、四分位範囲 38.0点）と比較して有意に低く、矯正治療後のOHRQoLが高いことが明らかになった。また、矯正治療後のOHIP得点は対照群のOHIP得点（中央値 14.0点、四分位範囲 16.5点）と比較して有意差が認められなかった。矯正治療前と対照群のOHIP得点と諸因子の関連性を重回帰分析を用いて調べたところ、う蝕経験歯数（Decayed, Missed and Filled tooth score: DMF歯数）とOHRQoLとの関連の強さと同程度に、矯正歯科治療の希望とOHRQoLとの間に関連が認められた。矯正治療後のOHIP得点から回顧治療前のOHIP得点を引いたものをOHIPの変化量とし、諸因子との関連性を調べたところ、年齢において関連性が認められた。

矯正歯科治療を希望する患者は OHRQoL が低下していること、矯正歯科治療後の OHRQoL は回顧治療前に比べて有意に向上し、対照群と同じ程度に改善していることが示された。以上から、矯正歯科治療の目標設定の指標の一つとして OHIP を用いた OHRQoL の評価が重要であること、矯正歯科治療は OHRQoL の向上に寄与できることが示唆された。よって、審査委員会は本論文に博士（歯学）の学位論文としての価値を認める。